

## 本号の内容について

本号は三つの部分からなる。(1) 有馬斉氏の著作『死ぬ権利はあるか——安楽死、尊厳死、自殺幫助の是非と命の価値』(春風社、2019年)をめぐって、本誌の編集責任者品川哲彦と有馬氏とのあいだで交わされたコメントと応答とからなる一連のやりとり。(2) つぎに、論文2編。ひとつは、上述の一連のやりとりとは独立に、有馬氏が同書刊行から2年たった現時点での鎮静(sedation)に関する考察を主題として書き下ろされた論文であり、もうひとつは、2020年に公刊された『認知症患者安楽死裁判——事前意思表示書か「いま」の意思か』(盛永審一郎著、ベイツ裕子編集協力、丸善出版)にたいする書評を発展させた品川の論文である。(3) 最後に、書評1編を収めている。2020年に公刊された『フェミニスト現象学入門——経験から「普通」を問いなおす』(稲原美苗・川崎唯史・中澤瞳・宮原優編、ナカニシヤ出版)を論じた魚住洋一氏の書評がそれである。

### (1) 〈コメントと応答〉

『死ぬ権利はあるか』をめぐる一連のやりとりの発端は、2018-2020年度科学研究費補助金基盤研究(B)(一般)「先端医療分野における欧米の生命倫理政策に関する原理・法・文献の批判的研究」(課題番号18H00606 研究代表者:小出泰士芝浦工業大学教授)の2020年度第2回研究会(2020年2月16日、於上智大学)にある。当日、上の著作について、品川が書評を行なった。そのときの原稿を「品川コメント1st version」と呼ぶとすると、本号掲載の「書評 有馬斉『死ぬ権利はあるか——安楽死、尊厳死、自殺幫助の是非と命の価値』」は、この「品川コメント1st version」に、この「本号の内容について」に記してある経緯のおおよそを(電子ジャーナルゆえに、その論稿だけを独立に読む方もおられるだろうから)「はじめに」として記して加えて成り立っている。

さて、品川は研究会当日に先立って「品川コメント1st version」を有馬氏に送付しておいた。有馬氏はこれに応じて、研究会の席上でそれにたいする応答を配布した。それを「有馬リプライ1st version」と呼ぶと、この「有馬リプライ1st version」に、冒頭に経緯の説明、脚注に書誌情報への言及を新たに付し、若干の修正を加えたものが、本号掲載の「品川哲彦先生の書評への応答 Part I」である。

研究会の終了後、上記の共同研究では、2020年度の活動報告として『生命倫理・生命法

研究資料集 V』の編纂作業が進められ、この資料集は 2020 年 7 月に刊行された。品川は「品川コメント 1st version」に、研究会当日の質疑応答と「有馬リプライ 1st version」を参照して補遺として第 6 節を付し、「書評 有馬斉『死ぬ権利はあるか——安楽死、尊厳死、自殺幫助の是非と命の価値』に寄せて」と題して同資料集に寄稿した（同資料集、304-319 頁）。これを「品川コメント 2nd version」と呼ぶとしよう。一連のやりとりの時系列を明確にするために、この第 6 節を独立させて本号掲載の「有馬斉氏の当日のリプライへのコメント」とした。同資料集の編集過程において、品川は「品川コメント 2nd version」を有馬氏に原稿を送付しておいた。有馬氏はこれに応じて同資料集に、「有馬リプライ 1st version」に、「品川コメント 2nd version」の第 6 節にたいする応答を含めて修正した論稿を「品川哲彦先生による拙著『死ぬ権利はあるか』についての書評への応答」（同資料集、320-333 頁）と題して同資料集に寄稿した。

本号ではその後のさらなる議論の展開を試みた。当初、有馬は現在掲載されているのとはかなり異なる原稿を提出し、品川もそれに応える、現在掲載されているのとはかなり異なる原稿を用意した。だが、品川のみるところ、論点のずれ違いがあまりに大きかった。そこで、最も大きな違いと思われた直観という概念の意味についての若干の説明をメールで有馬氏に送った。もし、有馬氏がすでに提出した原稿の修正を不要と判断するなら、双方の上述の原稿を掲載するつもりであった。しかし、有馬氏は品川の指摘を受けてさらに修正した原稿を再提出してくださった。それが現行の「品川哲彦先生の書評への応答 Part II」である。これに対応して、品川も原稿を修正して現行の「拙評「有馬斉『死ぬ権利はあるか』」に関する誤解とずれ違いについて——あるいは、倫理学の論文を書くということ」にまとめた。以上の経緯を整理して本稿末尾に図表に示しておく。

さて、『死ぬ権利はあるか——安楽死、尊厳死、自殺幫助の是非と命の価値』については、これまでも複数の書評が寄せられている。発刊された 2019 年に「週刊読書人」に書評を載せた香川知晶氏によるそれは、最も早い時期の書評のひとつである。その後、香川氏は同書評を敷衍した論稿を公表されている（『東アジアの尊厳概念』、加藤泰史・小倉紀蔵・小島毅編、法政大学出版局、2021 年、381-387 頁）。そのなかで香川氏は、同書が「人の存在に内在的価値があるという見方」を「最終的に擁護」して（限度を超えた苦痛がある場合を除いて）安楽死、尊厳死、自殺幫助を許容せず、「持続的で深い鎮静」も非と論定している点を「重要な結論」と指摘したうえで、

もちろん、とりあえず倫理的な水準だけに限っても、本書にはさまざまな批判が出てくるはずである。たとえば「人格が合理的本性を備えた理性的存在であるという点を重視」(488頁)する「カント主義」は本当に人の命や存在の内在的価値をめぐる著者の直観の根拠たりうるかどうか、その直観に反する帰結が導かれないのか、大きな疑問が残る。にもかかわらず、「患者の死期を早めうる医療者のふるまい」が露骨に懲罰されること目立つ現状を考えると、本書の一貫した反論には大きな意義が認められてしかるべきである(前掲、『東アジアの尊厳概念』、386頁)。

と記してそのコラムを結び、さらに註のなかで、

画期的であることは、本書刊行後、短期間のうちに多くの書評が登場したことからもうかがえる。一連の書評については本書第三刷(2020年)の「付記」(540頁)に記されているが、なかでも品川哲彦との応答は出色であると思う(同上、387頁)。

と付記している。本号に品川のコメントと有馬氏のリプライから成る一連のやりとりを本号に掲載するのも意味なしとしないゆえんである。

## (2) 〈論文〉

以上の一連のやりとりとは別に、有馬氏には、同書では扱いきれなかったその後の進展を展開した論稿「鎮静の倫理を研究することの意義について」を寄稿していただいた。

品川哲彦の論稿『認知症患者安楽死裁判』の投げかけるものは、すでに記した小出泰士を代表者とする科研費による共同研究の2020年度第2回研究会(2021年3月20日、zoomによって開催)での品川の報告に、若干の修正を加えたものである。

## (3) 〈書評〉

魚住洋一氏の論稿「フェミニスト現象学の『限界』——稲原美苗・川崎唯史・中澤瞳・宮原優編『フェミニスト現象学入門』を読む」は、もともと2020年3月12日に行われた現代倫理学研究会(zoomによって開催)における『フェミニスト現象学入門』合評会でなされた報告である。その報告原稿をいただいた品川は魚住氏に本誌への掲載を希望した。というのも、本誌は4巻2号(2017年)で「現象学と倫理学」に関する特集を組んだことがあ

り、本書評のテーマはそれにも関連するものだからである。さいわいに、魚住氏は提案を受け容れてくださり、若干の修正を加えたうえで、本誌に掲載する運びとなった。

図表：(1) の成立経緯についての説明

	品川	有馬
～2020年2月16日	「品川コメント 1st version」→有馬に送付	
2月16日		「有馬リプライ 1st version」
7月31日 『生命倫理・生命法資料集V』	「品川コメント 2nd version」を有馬に送付→同原稿を資料集に掲載（「書評 有馬斉『死ぬ権利はあるか—安楽死、尊厳死、自殺帮助の是非と命の価値』に寄せて」、資料集、304-319頁）	「品川コメント 1st version」「2nd version」に回答する「有馬リプライ 2nd version」を資料集に掲載（「品川先生による拙著『死ぬ権利はあるか』についての書評への回答」、資料集、320-333頁）
～2021年5月	「有馬リプライ 3rd version」にたいして、新たにコメントを作成（「品川コメント 3rd version」）→しかし、双方の 3rd version でのずれの大きさから、公表をいったん止めて、主として直観概念をめぐり、有馬とメールのやりとり→有馬から送付された「有馬リプライ 4th version」に対応して、「品川コメント 3rd version」を修正（「品川コメント 4th version」）	以上の回答を新たに書き直して「品川哲彦先生への回答 Part I」「Part II」の2つの論稿に分けて品川に送付（「有馬リプライ 3rd version」）→品川とのメールのやりとりを経て再検討→「有馬リプライ 1st version」に加筆修正して「品川哲彦先生への回答 Part I」とし、「有馬リプライ 3rd version」の論点の一部を「Part II」に再編成（「有馬リプライ 4th version」）→品川に送付。
本号に掲載されている論稿	「書評 有馬斉『死ぬ権利はあるか』」（≒「品川コメント 1st version」）、「有馬斉氏の当日のリプライへのコメント」（＝「品川コメント 2nd version」の6節）、「拙評「有馬斉『死ぬ権利はあるか』に関する誤解とすれちがいについて」（＝「品川コメント 4th version」）。	「品川哲彦先生への回答 Part I」（≒「有馬リプライ 1st version」）、「品川哲彦先生への回答 Part II」（＝「有馬リプライ 4th version」） 上記の一連のやりとりとは独立に、「鎮静の倫理を研究することの意義について」を新たに書き下ろして掲載。